

大鹿村から運ぶ要対策土は有害残土

大鹿村から運ばれる「要対策土」とは自然由来のヒ素などの重金属＝「特定有害物質」を含み、汚染の広がりに対策が必要とされる残土です。

足尾銅山・神岡鉱山など多くの鉱山では、ヒ素やカドミウム（イタイイタイ病の原因物質）などの重金属が流域の河川や地下水に流出し、健康被害や基準値を超えた米の出荷停止など大きな被害を地元にあたえてきました。

重金属は地上で酸素に触れると酸化して猛毒化する

土の中ではおとなしくしている重金属は、いざ掘り出されて地上で空気や水分に触れると酸化して猛毒化します。特にヒ素は地上で酸素に触れると猛毒の亜ヒ酸に変化し、その毒性は青酸カリに匹敵すると言われていています。

ヒ素は微量でも発がんのリスクを高める

また、ヒ素は微量でも身体内に蓄積し、皮膚や全身の組織をおかし、神経障害など重大な病気を引き起こします。近年発がんのリスクを高めることがわかり、国際的に基準の見直しの動きが広がっています。ヒ素を多く含むひじきなどの食材に対しては英国食品規格庁（Food Standards Agency : FDA）はひじきを食べないように英国国民に対して勧告しています。

今でも鉄道工事現場で地下水の汚染が発覚 安全性に多大な疑問

ヒ素などの重金属は土壌や地下水を汚染しないために永続的な厳重な管理が必要です。しかし、鉄道建設現場では今でも重金属による地下水の汚染が起きています。

北海道新幹線では、北斗市にある要対策土の盛土の直下にある地下水が重金属のセレンにより環境基準を超えて5度にわたり汚染が発覚。そのたびに工事は数か月間も中断しました。

リニア工事でも、4月13日山梨県早川町のリニア工事で発生した土を保管している仮置き場でその地下水から環境基準の1.4倍のセレンが検出されたと報道されています。

このように要対策土を閉じ込める対策に完全なものではなく有害残土の持ち込みには安全性に大きな問題があります。

※ 署名にご協力ください